情報モラル電子紙しばいシナリオ

王様の耳はコッペパン

昔々、あるところにタッ君という理髪師がおりました。

タッ君は国一番の理髪師と噂されるほど腕が確かで、タッ君の噂は王様の住むお城にまで届きました。

王様は、タッ君をお城に呼び出しました。タッ君に髪を切ってもらうことにしたのです。

タッ君は早速お城に出かけました。

王様　「おお君がタッ君かね、たいそう腕が高いとの評判だが私の髪を切ってくれるかね」

タッ君「もちろん喜んで。しかし王様、髪を切るためには、その被り物を取っていただかなければなりません」

王様は、頭の周りを覆う被り物をかぶっていたのです。

その時、大臣が厳かに言いました。

大臣　「タッ君、今から見るもの聞くものは、この国の大切な秘密だ。一切口外無用、誰にも秘密を洩らさないことを約束できるかな？もし約束できないようだったらこのまま帰ってもらうことになるが。」

タッ君は驚きましたが、王様の髪を整えることは理髪師として大きな名誉、誇らしいことだったのでここで断られてなるものかと勇んで答えました。

タッ君「もちろんでございます。ここで見聞きしたことは誰にも話しません」

大臣は満足げにうなずきながらこう言いました。

大臣　「うむ、それでこそ国一番の理髪師、あっぱれな心がけである。決して秘密を漏らすでないぞ」

大臣がそう言ったのを合図に王様が被り物をとりました。

その王様の姿を見たときタッ君は腰が抜けそうなほど驚きました。なんと王様の耳はコッペパンにそっくりな形だったのです。

大臣　「いつのころからか王様の耳はこんな形になってしまわれたのだ。このことは絶対人に話してはいけないぞ。」

タッ君「ははーっ」

タッ君は早速王様の髪を切りました。タッ君の腕前は評判通り確かもので王様は大変満足してたくさんのご褒美をくださいました。

それからタッ君は何度もお城に呼ばれ王様の髪を切りました。もちろん秘密は誰にも話しませんでした。

ところが何度かお城に通ううちタッ君は秘密を守るのがつらくなってきました。

もともとおしゃべりなタッ君だったので、誰かにこのことを話して国の大切な秘密を知っていることを自慢したくなったのです。

それからというものタッ君にとっては秘密を黙っていることが大きなストレスになりました。寝ても覚めても考えることは王様の耳の秘密のことばかり、何をやっても楽しくありません。

とうとう我慢できなくなったタッ君は、その頃流行っていた「インライン」というアプリを使って秘密を話してストレス発散することにしました。

インラインというのは、スマートフォンのアプリでグループの中で話したことは他の誰にもばれないという大変便利なものでした。

タッ君は本当に信頼できる数人の友達を誘ってインラインのグループを作り、秘密を話しました。

タッ君「今から話すことは大切な秘密だから絶対黙っていてね。」

トッ君「大丈夫、おれたちは親友じゃないか。秘密は守るよ。」

ヤノ君「先輩の頼みなら絶対ですよ。任せてください。」

萌さん「私たちを信頼して。私たちはあなたの信頼を裏切らないから」

タッ君「みんなありがとう。やっぱり持つべきものは友達だね」
こうしてタッ君はとうとう王様の秘密をばらしてしまいました。

タッ君「あースッキリした。これで元のくらしにもどれるぞ」

秘密を話したタッ君は溜め込んでいたストレスを吐き出して超スッキリ、以前のような明るい生活を取り戻しました。

それから数日の間は、このまま何事もなく平穏な日々を続くかと思われました。

ところが蔭では国中に恐ろしい噂が広まっていたのです。

「王様の耳は、大きなフランスパンの形をしていて、それを月に一度理髪師が切り取って国中のパン屋でこっそり売っているらしい」というものです。

本当の事とは大分かけ離れていますが、噂というものはそんなもので、伝わるうちにどんどん大きくなって行ったのです。

タッ君「ヤバイ、ヤバイ、こんな噂が広まっていることが王様にばれたら、おれが処罰されてしまう。ここは王様にばれる前にトンズラだ。」

タッ君はその日のうちに着の身着のまま、あわてて国を抜け出しました。

それにしてもなぜこんな噂が広まってしまったのでしょう。

それは、こんな理由です。

タッ君から秘密を打ち明けられた友達もタッ君と同じように秘密を黙っているのがつらくなって別の友達に話してしまったのです。その友達もまた・・というように噂はあっという間に広がっていきました。

いくら便利なインラインでも使っているのは人間なので秘密を守るのは難しいようですね。

おしまい